

贈僧正頼瑜諸流相承考

田 中 悠 文

はじめに

筆者は、前に伝法院選書七『頼瑜―その生涯と思想―』（平成十二年智山伝法院刊）第二章第三節に「頼瑜と事相」なる題名にて、頼瑜僧正が伝えた傳燈法流のあらましを略述した。ここでは、従来あまり明確ではなかった頼瑜僧正ゆかりの中性院流なる法流の特色と、同僧正が伝えられた諸法流について、聖教・史料類を精査して、浮彫になった特記事項を摘記した。

本稿では、筆者既述の前論考をふまえて、その内容をなお一層精密なものとするため、『智山諸法流相承』に伝えられる頼瑜僧正由来の聖教類等を援用し、頼瑜が諸阿闍梨より受法した諸法流を、年代・伝授形態・阿闍梨・流派別に分類した一覧表を作成した。更に、その成果に立脚して、頼瑜の筆録、あるいは選述にかかる事相関係著作と相承法流の連関を把握することを試みた。これによって、頼瑜自身が実際に相承した法流のしほりこみが可能になると考える。と同時に、頼瑜自身、その伝承に最も心を砕いた法流が、いかなる流派だったのかと

いった興味深い側面をも浮彫に出来ると考える。

以下、細目をあげれば次のとおりである。

〈頼瑜僧正の諸法流受法〉

【表Ⅰ】 頼瑜諸法流受法略年譜

【表Ⅱ】 具支灌頂受法一覽

【表Ⅲ】 印可灌頂阿闍梨別一覽

【表Ⅳ】 印可灌頂流派別一覽

〈諸阿闍梨からの法流伝受〉

■〈頼瑜僧正の諸法流受法〉

ここでは、頼瑜僧正が、あまたの阿闍梨から、多岐にわたる法流を付嘱された様子を、略年譜形式でもって跡付ける。

そこで筆者は、識者の間で「智山諸法流相承」とよび慣わされる、いわゆる「諸法流相承」所伝の聖教である『野澤諸法流印信類聚』所収の各流にわたる印信・血脈を史料的に用いて、運敵僧正撰『結網集』の所説を補綴する。何故『野澤諸法流印信類聚』を用いるのかといえ、『類聚』の原点と目される浄空僧正の智山諸法流聖教には、『智山小秘函』等、智山秘蔵の根来寺伝来の古聖教類がいくつも収められており、それらの記述によって『眞俗雜記問答鈔』の背景確認、また『結網集』の所説の確認が可能であるからである。

【略号表】(真) 〓 『眞俗雜記問答鈔』 ↓ 例… (真七—一二八下) ↓ 眞言宗全書本七卷一二八頁下

(東) 〓 東密諸法流印信類聚 ↓ 例… (東十三古安一二六) ↓ 東密諸法流印信類聚十三卷古安流一二六頁

- (成) 〓 東密諸法流印信類聚十五卷(淨妙比丘伝 智山諸法流相承の内) 『成就院本願御流小卷物』 五卷
- (理) 〓 東密諸法流印信類聚十一卷 『理性院流宝心阿闍梨流鳥羽僧都流印信』 二卷
- (勸) 〓 東密諸法流印信類聚八卷 『勸修寺流切紙』 十一本
- (実) 〓 續群書類従二六輯上 『蓮藏院僧正実深灌頂資』 一卷
- (金) 〓 東密諸法流印信類聚六卷 ↓ (東六金) ↓ (智山小秘函) の内 『金剛王院小卷』 五卷
- (遍) 〓 續群書類従二六輯上 『遍智院法印灌頂資記』 一卷
- (☆) 〓 大正蔵七九卷二五二九番 『十八道口決』 (本末)
- 大正蔵七九卷二五三〇番 『野金口決鈔』 一卷
- 大正蔵七九卷二五三一番 『野胎口決鈔』 上下二卷
- 大正蔵七九卷二五三二番 『護摩口決』 一卷
- (智) 〓 『智山書庫目錄』 ↓ 例… (智一—一三六奥) ↓ 『智山書庫目錄』 卷一—一三六頁 奥書
- ⊕ 〓 『真福寺文庫撮影目錄』 ↓ 例… 『⊕上—五上奥』 ↓ 上卷五頁上段奥書
- ⊗ 〓 『天野行宮金剛寺古記』 ↓ 例… 『⊗一二五頁二〇七番』
- * [★] 〓 受法内容等の聞き書き編纂に関する記事である。
- * 流派名に付した○数字は、頼瑜が受法した流派順にふつっている。ただし同一流派を重受した場合には初出の番号のみを付して別途注記していない。
- * 具支・印可の項目に印した記号については次のとおり。
- は印可灌頂受法有り、◎は具支灌頂受法有り、△は受法不明である。

【書誌・解題】『智山諸法流』所伝「頼瑜（頼縁・頼淳乃至聖増）相承古聖教」内容一覽

※◎『智山諸法流』という傳授形態の興起は、智山化主淨空僧正が倉田明星院海淨・清水寺実詮・高野山覚阿・葛西蓮光等の諸阿闍梨より相承した諸法流を、謙順僧正に伝えたことに、その端緒が求められる。

●その内容を子細に吟味してみると、そこには根来寺から大須観音宝生院、あるいは智山経庫に伝来し秘襲されて来た、頼瑜僧正由来の古聖教類がかなりまとまった体裁で集積転写されていることが知られる。大須観音宝生院の場合、その伝承には「諸流灌頂秘藏鈔」の編者である政祝阿闍梨が関与していた事がうかがわれ、その内容は後の河内長野延命寺七世真常和上につながる禪進―教嶽相承として集成され、覚阿阿闍梨等を通じ、かなりの内容が伝えられている。さらに清水寺実詮は、新安流の鼻祖として高名な淨嚴和上の高弟の一人であり、淨空能化は、実詮阿闍梨より新安流の皆伝を受けられ、その内容も当然の如く淨空能化相承分に含まれて居り、所伝の聖教類は今なお智山書庫に伝えられている。智山諸法流とは、上記の様な複合形体なのである。

●以上によって、一般に淨空能化から始ったと思われる「智山諸法流傳授」は、延命寺上田靈城和上『瞿呬耶通信』（延命寺真常相承の諸法流について）の御指摘にある様に、延命寺真常和上の前世代の禪進―教嶽相承が一つの先駆を成していた事は認識すべきである。さらに、根来寺以来の法流を包括的に伝承する事の濫觴は、実に上述の政祝阿闍梨に求められることは、さわめて興味深い。

●この様な成立過程を経て形成された『智山諸法流相承』は、智山化主隆榮僧正の時に泉山の尋玄・湛然両長老に伝えられ、佐伯旭雅大僧正の手を経て、昭和四年、時の大本山勸修寺門主和田大円大僧正によって公に傳授された。その時、川崎辨龍・森田慈航・佐竹信光・児玉雪玄の諸阿闍梨によって『智山諸法流相承印信』をもとに、

大円和上別傳の諸法流印信類をも加え、『野澤諸法流印信類聚』が編纂、印刷に付された。

● 今般依拠した本は、先頃「野澤諸法流印信類聚刊行会」によって刊行された『東密諸法流印信類聚』所収本であり、その底本は、いわゆる第三版本である。第三版本自体は、昭和十二年大本山護国寺において、富田教純大僧正を傳授大阿闍梨に迎えて開筵された『諸法流傳授』の折に、網代智海・林真雄・守山聖真の三師によって石版印刷に付されたものである。

ちなみに『諸法流傳授』は、最近では昭和六十二年頃に田端興樂寺において、また平成三年には京都の東寺において、豊山派集議席の南波義範大僧正を傳授大阿闍梨に迎え、その傳授がなされた。以下、『智山諸法流相承』に伝えられる、頼瑜僧正ゆかりの古聖教類の項目、ならびに奥書等を紹介する。なお、④は参考聖教、本文中の(※)は筆者の補註である。

④ 『成就院本願御流小巻物』 五巻

◎ 『正式名称』 『成就院根来寺密嚴(院) 々上人御流小巻物』

● 〈巻一〉 『成就院根来寺』

〈内容〉 『成就院根来寺』(成就院五重) ・ 『血脈』

〈年次〉 正慶二年五月九日(一二三三三)

〈相承者〉 …… 性信—寛助—信證—琳助—心蓮—寛琳—明任—法性—信阿—信範—真空—隆盛^(貞治形)—頼瑜—頼

淳—増喜—聖憲—聖増

〈会場〉 根来寺灌頂道場

『成就院密嚴院』〔傳法灌頂印信〕

〔年次〕正慶二年五月九日（一三三三）

〔相承者〕……性信—寬助—覺鑊—兼海—隆海—覺尋—定尋—隆盛—（具持母）賴瑜—賴淳—

增喜—聖憲—聖增

『々』〔大阿闍梨位印信〕・「成就院五重」・「血脈」・「紹文」

〔年次〕正平十七年十二月二日（一三六二）

〔相承者〕……性信—寬助—覺鑊—兼海—隆海—覺尋—定尋—隆盛—（具持母）賴瑜—賴淳—

增喜—聖憲—聖增

●〔卷二〕『成就院真光（院）』

〔内容〕『成就院密嚴院方』〔傳法灌頂印信〕・「大阿闍梨位印信」・「血脈」

〔年次〕建武元年五月六日（一三三四）

〔相承者〕覺鑊—兼海—隆海—覺尋—經尋—房海—覺禪—經瑜—賴瑜—賴淳—增喜

〔会場〕高野山花遊院御持仏堂

『成就院閉觀房』〔傳法灌頂印信〕・「大阿闍梨位印言」・「成就院五重」・「血脈」・「裏付中性院記」

〔奥書〕「文永五年七月十日巳未〜午剋於高野山花遊院御持仏堂從法印御房奉傳受了

金剛佛子賴瑜（生前四十三）

建武元年五月六日傳受同十日以中性院御自筆本書寫之畢

金剛佛子增喜（生年三十六）

右正平十八年（壬正月二日）於根来寺中性院授兩部傳法灌頂職位了

阿闍梨權大僧都法印增喜

右永和二年（五月十日）於根来寺金剛台院兩部灌頂職位聖增授之

阿闍梨權少僧都法眼和尚位聖憲

〈年次〉 文永五年七月十日（一二六八）

建武元年五月六日傳受（一三三四）

建武元年五月十日中性院御自筆本書写（々々）

正平十八年正月二日傳受（一三六三）

永和二年五月十日傳受（一三七六）

〈相承者〉……覚鑱—證印—玄證—房海—覚禪—經瑠—頼瑠—頼淳—増喜

〈※参考〉『裏付中性院記』抄記「文永五年五月二十一日、法印御房（經瑠）のもとに參上し、法印伝領本

『密嚴院流諸尊法等隆海法印記』の筆授を許可され、後日の再治を託された。その折りに印可を求めたが、その時には許可されなかった。

同二十三日、法印より印可が許可され、御記『印可加行所作次第』を写得する。

同月二十七日、印可加行開白し、六月三日結願、同日印可を遂げた。

● 〈卷三〉『成就院木幡』

〈内容〉『成就院（密嚴院）』（傳法灌頂印信）・「血脈」・「秘密印信」

〈年次〉 文應二年正月十三日（一二六一※同年改元して弘長となる）

『成就院密嚴院』

〔相承者〕 …… 性信—寛助—覺鏝—兼海—隆海—覺尋—定（淨）—尋^{（良情妙）}—隆盛—真空—頼瑜
 〔会場〕 木幡觀音院灌頂道場

〔内容〕 〔傳法灌頂印信〕・〔血脈〕・〔秘密（成就院五重）〕

〔年次〕 文應二年正月十三日（一二六一）

〔相承者〕 …… 性信—寛助—覺鏝—證印—玄證—房海—定意—實證—真空—頼瑜

〔会場〕 木幡觀音院灌頂道場

●〔卷四〕『紫金臺寺（泉殿御室）』（※この相承は大御室方と云い得る）

〔内容〕 『成就院』〔傳法灌頂印信〕・〔血脈〕・〔成就院五重〕印信）

〔年次〕 文應二年正月十（二）三日（一二六一）

〔相承者〕 …… 性信—寛助—信證—琳助—心蓮—寛琳—明任—道範—劔覺—真空—頼瑜

〔会場〕 木幡觀音院灌頂道場

「同」

〔内容〕 〔雙圓性海大事〕・〔血脈〕・〔雙圓性海口伝〕

〔年次〕 文應二年正月十（二）三日（一二六一）

〔相承者〕 …… 泉殿御室（覺性）—寂忍—心蓮—寛琳—明壬—道範—劔覺—真空—頼瑜

（※血脈に二品親王「泉殿」とあり、これを淨空能化は「大御室性信親王方也」というが、これは誤解である。標題にある「紫金臺寺」、あるいは「泉殿御室」とは、鳥羽帝第五皇子の「五ノ宮」こと覺性法親王のことである。）

●〔卷五〕「傳法灌頂印信（本願御流）清淨金剛院」

〔内容〕「傳法灌頂印信」・「血脈」・「大阿闍梨位印」

〔年次〕正慶二年二月十日（一三三三）

〔相承者〕……性信—寬助—覺鑊—兼海—隆海—覺尋—定尋—隆盛—覺證—良殿

〔会場〕豊福寺灌頂道場

●〔理〕「理性院流宝心阿闍梨流・鳥羽僧都流印信」二卷

〔正式名称〕「理性院流宝心阿闍梨流・鳥羽僧都流賴瑜相承印信」

●〔卷一〕「醍醐寺理性院宝心阿闍梨流」

〔内容〕〔紹文〕・「血脈」・「傳法印信」

〔年次〕文應二年正月十二日（一二六一）

〔相承者〕……勝覺—賢覺—賢信—乘印—勝因—覺舜（阿）—真空—賴瑜

〔会場〕木幡南院道場（※四七三頁七行参照）

●「理性院鳥羽僧都流」

〔内容〕〔紹文〕・「血脈」・「灌頂印明口決」

〔年次〕文應二年正月十二日（一二六一）

〔相承者〕……賢覺—宗命—宗嚴—行嚴—真空—賴瑜

●「理性院鳥羽僧都流」

〔内容〕〔紹文〕・「血脈」・「傳法印明口決」

〔年次〕弘長四年二月四日（二二六三※同年改元して文永となる）

〔相承者〕……賢覺—宗命—宗嚴—行嚴—真空—賴瑜

〔会場〕醍醐寺成身院道場

〔参考〕（※四七四頁七行に「永仁六年（一二九八）八月十六日庚午於中正院受印可畢

五箇印明如三宝院印明也」とある。恐らくは賴淳の受法記録か？）

『授印可作法』

〔内容〕〔授印可作法〕・「裏書」

〔奥書〕「弘長四年二月十一日依木幡御口決記之畢

金剛資賴瑜

嘉元元年十一月三十日酉刻賜之同日子剋令書写之畢」

金剛佛子良殿

同十二月一日已剋奉傳授之仰出云妙成就傳法之時教誡之後授之

第二第三八追授之也於第四重者最後授可慎云々」

〔年次〕弘長四年二月十一日（二二六三）木幡御口決記

嘉元元年十一月三十日（一二〇三）書写

同十二月一日傳受（同）

〔会場〕木幡南院道場

『裏書』〈内容〉〔理性院宝心傳法許可〕

〈年次〉弘長二年十二月九日（一二六二）

〈会場〉木幡南院道場

●〈卷二〉『理性院流印信（宗命・宝心）』

〈内容〉〔理性院許可印信〕※本文欠

〔仮題〕『授印可作法』〔授印可作法〕・〔宗命方傳法重〕・〔宝心方傳法〕

〈年次〉建武四年五月十三日（一三三七）

〈会場〉中性院道場

②補①『小野方理性院流印信』（賢覚―宗命相承）六紙六裏

〈内容〉〔許可理性院流〕・〔第二重理性院流〕・〔第三重理性院流〕

〔第四重理性院流〕・〔理性院流紹文〕・〔理性院流血脈〕

〈相承者〉……宗命―宗嚴―行嚴―観俊―真空―頼瑜―聖忠―聖尋―聖珍―信瑜―

―任瑜―政祝―増政……………長義―長音―日譽―賢真―玄瑜―惠傳―賢秀―隆鏤―盛
辨―永日―禪進―教獄―真常……………

②補②『理性院流（賢覚―宝心乃至智山相承）』十三紙（以下印信散逸。目録のみ）

〈内容〉〔印可〕・〔許可〕・〔傳法許可印信〕・〔血脈〕・〔第二重大事〕

「第三重大事」・「求聞持大事」・「靈大事」・「ユギ大事」
「阿闍梨位大事」・「第三重」・「第四重」・「第五重」

勸 『勸修寺流切紙』十一通

〔正式名称〕『勸修寺流』

● 〈第一紙〉『勸修寺（中川方）』

〈内容〉〔秘密傳法灌頂秘印〕・「最秘」・「裏付」

〈年次〉 第一度…文永五年六月十四日（二二六八）

第二度…文永七年二月二十四日（二二七〇）

〈相承者〉 嚴覚—実範—朝譽—明遍—覚禅—經瑜—頼瑜—頼淳—増喜—聖憲—聖増

〈会場〉 第一度…高野山花遊院御持仏堂

第二度…仁和寺真光院

● 〈第二紙〉『勸修寺（小野六帖中印信）』

〈内容〉〔聖觀音印可〕・「小野六帖内印信」

〈年次〉「聖觀音印可」↓文永五年七月十三日

「小野六帖内印信」↓文永五年七月十五日

〈相承者〉 ……俊辨—經瑜—頼瑜—頼淳—増喜—聖憲—聖増

● 〈第三紙〉『勸流（石山方）』

〔内容〕〔紹文〕・「傳法灌頂印信」・「秘密灌頂印信」

〔年次〕弘長四年二月四日

〔相承者〕……慶鏤―真空―賴瑜……

〔会場〕醍醐寺成身院道場

●〔第四紙〕「勸修寺（石山方）」

〔内容〕〔紹文〕・「傳法灌頂印信」・「秘密灌頂印信」

〔裏書（傳法灌頂印口伝）〕・（秘密灌頂印口伝）・（私記）

〔年次〕弘長四年二月四日

〔相承者〕……嚴覚―靜譽―宗観―覚暹―慶雅―朗澄―顕良―慶鏤―真空―賴瑜……

●〔第五紙〕「初授嚴覚大事」

●〔第六紙〕「瑜祇經灌頂」

〔内容〕「瑜祇經灌頂（勸修寺最極秘密習）」

〔年次〕弘安八年二月二十九日（一二八五）

〔相承者〕……真空―明道―賴瑜……

〔会場〕木幡觀音院

●〔第七紙〕「勸修寺」

〔内容〕「傳法灌頂印信」本文欠・「紹文」・「血脈」本文欠

〔年次〕元応二年九月二十日（一三二〇）

〔相承者〕……道威―（※行智房）道聖……

●〔第八紙〕「勸修寺・持明院海僧正御房流傳受記（頼淳記）」

〔内容〕「勸修寺一結」・「持明院一結」

〔年次〕元徳二年十二月五日（一三三〇）

〔相承者〕……行智房（※道聖）―頼淳……

〔会場〕根来寺中性院道場

●〔第九紙〕「第三勸修寺」

〔内容〕「傳法灌頂印信」・「第二重」・「秘密（第三重）」

〔年次〕弘安五年正月一日（一二八二）

〔相承者〕……寛助―覚法―覚性―守覚―道法―道助―全恵―有海―頼淳……

〔会場〕智恵門院西房

●〔第十紙〕「瑜祇大事（求聞持）」

〔内容〕「瑜祇經灌頂（勸修寺最極秘密習）」

〔年次〕第一度…文永八年十二月四日（一二七二）

第二度…弘安八年二月二十九日（一二八五）

〔相承者〕第一度……真空―頼瑜―頼淳……

第二度……真空―明道―頼瑜―頼淳……

〔会場〕木幡觀音院道場

●〔第十一紙〕『勸修寺（勝鬘院）』（※仁和寺伝小野流の初伝）

〔内容〕「勸修寺（三重）」

〔年次〕延元元年八月十日（一三三六）

〔相承者〕……範俊―覚法―覚性―守覚―道法―道助―道深―法助―真尊―圓海

圓珠

良殿

〔会場〕根来寺清浄金剛院

●補①『小野石山流（静譽方勸修寺流）』五紙五裏大一裏

〔内容〕〔石山流静譽方紹書〕・「石山流静譽方傳法」・「石山流静譽方第二重」

〔石山流静譽方第三重〕・「石山流静譽方血脉」

〔相承者〕……嚴覚―静譽―宗観―覚暹―慶雅―朗澄―顕良―慶鏝―真空―頼瑠

聖忠―聖尋―聖珍―信瑠―任瑠―政祝……

●『金剛王院流小卷』五卷

〔正式名称〕『金剛王院流』五卷

●〔卷二〕『金剛王院醒（朱）金剛王院流五内聖増』

イ〔内容〕〔朱金剛王院〕紹文〕・「血脉」・「許可印信」・「傳法灌頂印信」

〔第二重・ユギ灌頂印信〕

〈年次〉 正慶二年四月十四日 (一三三三三)

〈相承者〉 …… 勝覺—聖賢—源運—雅西—見阿—空詮—智海—真空—賴瑜—賴淳

增喜—聖憲—聖增

〈会場〉 根来寺中性院道場

口 〈内容〉 (「血脈」・「許可印信」・「(初重) 傳法灌頂印信」・「(朱) 第二重秘密灌頂印信」

〔第三重 ユギ灌頂印信〕

〈年次〉 正慶二年四月十四日 (一三三三三)

〈相承者〉 …… 雅西—實賢—道圓—覺智—理海—性海—道空—真空—賴瑜…

〈会場〉 根来寺中性院道場

ハ 〈内容〉 (「紹文」 本文省略・「血脈」・「許可印信」・「傳法印信」・「秘密印信」

〔ユギ印信〕

〈年次〉 正慶二年四月十四日 (一三三三三)

〈相承者〉 …… 實賢—勝尊—勝円—真空—賴瑜…

〈会場〉 根来寺中性院道場

ニ 〈内容〉 (「傳法灌頂印信」・「第二重印信」・「第三重印信」・「血脈」)

〈年次〉 正慶二年四月十四日 (一三三三三)

〈相承者〉 …… 源運—泉海—雅西—瞻空—澄空—倫秀—真空—賴瑜…

〈会場〉 根来寺中性院道場

ホ 〈内容〉 「傳法灌頂・第二重・第三重印信」・「血脈」

〈年次〉 正慶二年四月十四日（一三三三）

〈相承者〉 ……瞻空―円弁―倫秀―真空―頼瑜…

〈会場〉 根来寺中性院道場

ヘ 〈内容〉 「紹文」・「血脈」・「傳法灌頂・第二重・第三重・蘇悉地」

〈年次〉 正慶二年四月十四日（一三三三）

〈相承者〉 ……尊源―了真―真空―頼瑜…（※尊源師以前は不載）

〈会場〉 根来寺中性院道場

ト 〈内容〉 「傳法灌頂・第二重・蘇悉地」・「血脈」

〈奥書〉 「已上金剛王院七流正平十七年九月晦日於中性院之道場授聖憲律師了

傳授大阿闍梨權大僧都法印大和尚位増喜

已上金剛王院七流永和二年五月九日於金剛臺院之道場授聖増矣

傳授大阿闍梨權少僧都法眼和尚位聖憲

右智山小秘函ノ中令寫也僧正淨空

金剛王院流小卷五本之内也」

〈年次〉 頼淳―増喜…正慶二年四月十四日（一三三三）

增喜—聖憲…正平十七年九月晦日(一三六二)

聖憲—聖增…永和二年五月九日(一三七六)

〔相承者〕…雅西—賢海—賢淳—心覺禪尼(木津)—真空—賴瑜…

〔会場〕 賴淳—增喜…根来寺中性院道場

增喜—聖憲…根来寺中性院道場

聖憲—聖增…根来寺金剛臺院道場

● 〈卷二〉『三寶院実賢方(朱) 金剛王院流五内』(※金三方)

〔内容〕〔紹文〕・「傳法灌頂三重次第」・「許可印信」・「傳授印可作法」

〔年次〕元徳三年二月十九日(一三三一※同年改元して元弘となる)

〔相承者〕…勝賢—実賢—如実—実心(蓮花谷聖人)—道聖(行智房)—賴淳

● 〈卷三〉『瑜祇経印信金剛王院(朱) 金剛王院五内』

〔内容〕〔瑜祇塔圖〕

〔裏付〕「御筆云雙圓性海談^{ニハ} 四曼自性重如月殿説^{ニハ} 三密自樂^{ニ云}

師口云大師此塔重如月殿尺給密嚴花藏此塔形也

兩部金蓮月殿也

口云龜是器界

蓋下^{ナリ}口^{ナリ}水可思之

● 〈卷四〉『是古(醍醐) 流仁木流(朱) 金剛王院五内』

●〈卷五〉「同」

〔内容〕〔鳥羽僧正云灌頂有様〕・醍醐寺第重・第二重秘密三寶院權僧正

第三重・是古第三・秘密文）

〔奥書〕〔文永五年七月十三日被許三寶院印可之次賜此切小卷物畢⁷

仰云此金剛王院大僧正実眼（賢）記也云云

金剛資賴瑜

〔年次〕文永五年七月十三日（一二六八）

〔相承者〕……經瑜―賴瑜―賴淳―增喜―聖憲―聖增

〔会場〕仁和寺真光院道場

〔地〕智山「中性院流（實勝・賴瑜相承）」二十紙十四裏附「付法狀」一紙

〔内容〕〔許可印信〕・「紹文」・「傳法紹文」・「血脈」・「第二重」・「第三重」

〔瑜祇灌頂〕・「阿闍梨位大事」・「靈灌頂」・「座主相承」・「惣許可」

〔菩提心論灌頂〕・「理趣經灌頂」・「瑜祇印信」・「瑜祇十五尊各別印明」

〔瑜祇切文〕・「付法狀」

〔相承者〕……實勝―賴瑜―賴淳―增喜―聖憲―聖增―聖融―聖覺―澄政―融澄―

道澄―道信―聖空―專譽―性盛―叩雅―日譽―元壽―隆長―宥貞―運敵……

(地) 智山『中性院流(實勝・賴瑜相承)』十八紙十四通大一裹

〔内容〕(三宝院許可印信・血脈)・〔兩部灌頂印信・紹文・血脈〕

〔蘇悉地灌頂印信〕・〔第二重〕・〔第三重〕・〔ユギ一印三十七尊大事〕

〔瑜祇内作業灌頂〕・〔瑜祇灌頂〕・〔ユギ三重〕・〔瑜祇〕・〔阿闍梨位大事〕

〔靈灌頂〕・〔座主相承〕・〔總許可〕・〔理趣灌頂〕・〔菩提心論灌頂〕

〔八千枚大事〕・〔紹文案〕・〔瑜祇切文鏤字大事〕

〔相承者〕……賴瑜―賴縁―實真―等海―義印―義繼―賢繼―印融―覺融―快盛……

(※印信類聚第一卷・第十四・二三九頁)

(長) 『實勝方』長續印信』一紙一裹

〔内容〕(「印信」・「初重」・「二重」・「三重・四重」・「血脈」)

〔相承者〕……賴縁―實真―等海―義印―義繼―賢繼―印融―覺融―快盛……

(※印信類聚第二卷・第十九・一五一頁)

(地) 補①『三宝院流地藏院方道教―深賢―親快相承』十通目錄

〔内容〕(「許可」・「第二重」・「第三重」・「傳法」・「惣許可」・「極秘密」・「座主灌頂」〔靈灌

頂〕・「阿闍梨位」・「瑜伽瑜祇投花」)

(※印信類聚第一卷・第十一・一七一頁)

(地) 補② 『三寶院流地藏院方親玄—覺雄相承』二十二通目錄

〈内容〉〔許可印信〔印信・紹文・血脈二種・※目錄〕〕・〔傳法印信〕

※〔目錄〕〈内容〉〔許可〕・〔傳法灌頂阿闍梨位〕・〔第二重〕・〔第三重秘密灌頂〕

〔第四重極秘印〕・〔初地即極大事〕・〔第五重即身成仏・自身即身義〕

〔三部惣撰〕・〔座主灌頂・同口決〕・〔第六重法性塔・ユギ灌頂〕

〔五部阿闍梨位印明・法性不二塔婆秘印〕・〔唯授一人〕・〔法性入阿靈圓月輪〕〔第七

重〕・〔離作業灌頂偈〕・〔秘密灌頂印信〕・〔第八重離作業〕・〔日率都婆〕〔九重總許

可・内作業〕・〔灌頂修行私記〕

〈相承者〉……元海—実運—勝賢—成賢—道教—親快—親玄—覺雄—道快……

(※印信類聚第一卷・第十二・一七五頁)

【表I】頼瑜諸法流受法略年譜

日	時	會	處	阿闍梨	具支	印可	内	容			
①伝法院流(成就院流密嚴院方)											
康元元年冬(一一二五六)			仁和寺真光院	經瑜	◎	—		【広沢流】			
②安祥寺流											
文應元年(一二六〇)			木幡觀音院	真空	△	○		【臨終秘印】(真七—二二八下)			
血脈											
宗意	実嚴	成嚴	隆嚴	真空	頼瑜	頼淳	增喜	聖憲	聖增(東十三	古安一二五	許可血脈)
①伝法院流(成就院流密嚴院方木幡相承)											
了、文應二年一月十三日(一二六一)			木幡觀音院	真空	◎	○		【成就院五重】(東十五	成二九七)		
血脈											
覚鏝	兼海	隆海	覺尋	定淨	隆盛	真空	頼瑜(東十五	成二九九)			
③成就院流(紫金臺寺御流)											
了、文應二年一月十三日(一二六一)			木幡觀音院	真空	—	○		【紫金臺寺五重】(東十五	成三〇六)		
血脈											
寬助	信證	琳助	心蓮	寬琳	明壬	道範	劍覺	真空	頼瑜(東十五	成三〇六)	
了、文應二年一月十三日(一二六一)			木幡觀音院	真空	—	○		【双圓性海大事】(東十五	成三〇九)		
血脈											
二品親王(泉殿御室) 寂忍 心蓮 寬琳 明任 道範 劍覺 真空 頼瑜(東十五 成三〇九)											
【※文應二年九月二八日(真十八—三一八下)】 【※【雙圓性海大事】(⊕上—十五) 参照】											

贈僧正賴瑜諸流相承考

日	時	會	処	阿闍梨	具支印可	内	容
①伝法院流（成就院流密嚴院方）							
イ、文應二年一月十三日（一二六一）		木幡觀音院	真空		○		【秘密印信五重】（東十五 成三〇〇）
血脈							
寛鏡 證印 玄證 房海 定意 實證		真空 賴瑜（東十五 成三〇三）					
④理性院流							
ア、文應二年一月十二日（一二六一）		木幡南院	真空		◎		理寶心流傳法灌頂（東十一 理四六八）
血脈							
賢覺 賢信 乘印 勝因 覺舜（阿）		真空 賴瑜（東十一 理四六四）					
イ、文應二年一月十二日（一二六一）		ゝ	真空		○		理鳥羽僧都流傳法許可（東十一 理四六七）
血脈							
賢覺 宗命 宗嚴 行嚴 真空 賴瑜（東十一 理四六八）							
⑤三寶院流							
☆弘長元年五月五～九日（一二六一）		醍醐寺報恩院	憲深		—		【護摩類次第】受法（④下—五九九上）参照
☆弘長元年六月十六～三日（一二六一）		醍醐寺報恩院	憲深		—		【十八道】受法（大七九・二五三・九六頁中）
☆弘長元年暮秋中旬（一二六一）		醍醐寺報恩院	憲深		—		【金剛界法】受法（大七九・二五三・七九頁中）
☆弘長元年十月一～五日（一二六一）		醍醐寺報恩院	憲深		—		【胎藏界法】受法（大七九・二五三・八九頁上）
☆弘長二年一月二日（一二六一）		醍醐寺報恩院	憲深		—		【護摩】受法（大七九・二五三・九六頁上）
☆弘長二年一月十四日（一二六一）		醍醐寺報恩院	憲深		—		【神供】受法（大七九・二五三・九七頁上）
☆同九月、黃鐘上旬（一二六一）		醍醐寺報恩院	憲深		—		【薄雙紙】受法（大七九・二五三・九七頁上）
☆弘長三年二月二七日（一二六三）		醍醐寺報恩院	憲深		—		【作法口決】（④下—四五四下）参照

日	時	会	処	阿闍梨	具支	印可	内	容
⑥地蔵院流								
☆弘長二年十月三〜十一月(二二六)		—		?	—	—		『地蔵院流諸尊法伝受日記』聞書④下(五三四七)参照
④理性院流								
ウ、弘長二年十二月九日(二二六二)		木幡南院		真空	—	○		理實心傳法許可(東十一 理四七八)
エ、弘長四年二月四日(二二六四)		醍醐寺成身院		真空	◎	—		理鳥羽僧都流傳法灌頂(東十一 理四七〇)
血脈								
賢覺 宗命 宗嚴 行嚴 真空 頼瑜(東十一 理四七一)								
⑦勸修寺流(石山靜馨方・同中川実範方)								
ア、弘長四年二月四日(二二六四)		醍醐寺成身院		真空	◎	—		勸石山方傳法灌頂(東八 勸三二)
血脈								
靜馨 宗観 覺暹 慶雅 朗澄 慶鏤 真空 頼瑜(東八 勸三八)								
イ、文永五年六月一四日(二二六八)		高野山花遊院		經瑜	—	○		勸中川秘密傳法灌頂秘印(東八 勸三)
血脈								
嚴覚 実範 朝馨 明遍 覚禪 經瑜 頼瑜(東八 勸二十)								
②伝法院流(成就院流密嚴院方)								
ウ、文永五年七月十日(二二六八)		高野山花遊院		經瑜	—	○		『成就院閑観房五重』(東十五 成二七九)
血脈								
覚鏤 證印 玄證 房海 覚禪 經瑜 頼瑜(東十五 成二九三)								

贈僧正頼瑜諸流相承考

日	時	会	処	阿	關	梨	具	支	印	可	内	容
⑦勸修寺流（中川実範方）												
ウ、文永五年七月一三日（二二六八）		仁和寺真光院		經瑜	—	○	勸	【聖勸音】印可（東八 勸二六）				
血脈												
嚴覺 実範 朝譽 明遍 覚禪 經瑜 頼瑜（東八 勸二十）												
⑤三寶院流												
ア、文永五年七月十三日（二二六八）		仁和寺真光院		經瑜	—	○	三	寶院印可（東六 金五二）				
⑧金剛王院流												
ア、		醍醐寺成身院		真空	◎	—	金	傳法灌頂（東六 金三）				
血脈												
聖賢 源運 雅西 見阿 空詮 智海 真空 頼瑜（東六 金四）												
イ、文永五年七月十三日（二二六八）		仁和寺真光院		經瑜	—	○	金	【小卷】二卷（東六 金五二）				
⑦勸修寺流（中川実範方）												
エ、文永五年七月十五日（二二六八）		仁和寺真光院		經瑜	—	○	勸	【小野六帖】印信（東八 勸二六）				
⑤三寶院流												
イ、文永五年十二月八日（二二六八）		六條若宮御房		実深	—	○	諸	授印可了（実三五九上）				
⑦勸修寺流（中川実範方）												
オ、文永七年二月二四日（二二七〇）		仁和寺真光院		經瑜	—	○	高	尾助阿闍梨方第三重大事（東八 勸二四）				
③成就院流												
エ、文永八年十二月上旬（二二七二）		仁和寺真光院		經瑜	—	○	【若	凡若聖大事】（真十八—三三七下）				

日	時	会	処	阿闍梨	具	支	印	可	内	容
⑦ 勤修寺流 (石山静馨方)										
カ、文永八年十一月四日 (一一七二)			木幡觀音院	真空			○		「求聞持悉地成就印言」(東八 勸七二)	
⑤ 三宝院流										
★ 文永二年五月二八日～六月五日 (一一七三)			禅定院御坊庵室	聖守			—		「野月抄」十五 (真十九—三四一上)	
★ 同～六月六日 (一一七三)		同	同	同			—		「秘抄異尊」上下 (同 三四五上)	
★ 同～六月八日 (一一七三)		同	同	同			—		「秘抄作法」上下 (同 三四五上)	
⑥ 地藏院流										
弘安元年七月五～九日 (一一七八)			高野山小田原	實勝			—		「石山道場観」(真二—三六四上)	
弘安元年七月十六日 (一一七八)			高野山小田原	實勝			—		「理供養法」(因二—二〇七)	
弘安元年七月二三日 (一一七八)			高野山小田原	實勝			—		「上醍醐准胝堂曼荼羅供作法」書写(因下二六七下)	
同七月十二～八月十九日 (一一七八)			高野山小田原	實勝			—		「妙抄」(真二—三六五上)	
⑤ 三宝院流										
★ 弘安二年一月下旬 (一一七九)			醍醐寺中性院	—			—		頼瑠(仮題)「八千枚疑問」2紙編纂	
⑥ 地藏院流										
★ 弘安二年六月十日 (一一七九)			高野山小田原	實勝			—		西南院臺皮籠御本を以て「作法集」 校合(因下—五四七上奥)	
★ 弘安二年七月十三日 (一一七九)			高野山中性院	—			—		頼瑠「玄秘鈔伝授開書」編纂(智—一八六奥)	
★ 同二年十二月二六日 (一一七九)			高野山中性院	實勝			○		地傳法灌頂(遍三四四下) 「薄草子」に添加する。(智—二一八上奥)	

贈僧正頼瑜諸流相承考

日	時	会	処	阿	闍	梨	具	支	印	可	内	容
⑤三寶院流												
★弘安五年一月下旬(二二八一)			醍醐寺中性院									頼瑜【傳法灌頂初後夜作法】編纂(智一一四八奥)
★弘安六年五月中旬(二二八二)			高野山伝法院									頼瑜【傳法灌頂初後夜作法】再治(智一一四八奥)
④理性院流												
才、弘安六年六月二八日(二二八三)									○			理性院正流妙成就印可(東十一 理四七四)
③成就院流												
弘安七年二月二日(二二八四)頃			仁和寺真光院		經	瑜						【澤見抄】傳受(【秘鈔問答】卷第三 大正二五三六 三四五頁中)
⑦勸修寺流												
キ、弘安八年二月二九日(二二八五)			木幡觀音院		明	道				○		勸瑜祇経灌頂(求聞持大事重受(東八 勸六)
⑧地藏院流												
★永仁二年七月九日(二二九四)			根来寺中性院									頼瑜【第三重御口決抄】編纂(⊙上一一九九下)
★永仁六年八月四日(二二九八)			根来寺中性院									【星供記】重加點(⊙下一五五八上)
★正安二年(一三〇一)			根来寺中性院									【後七日事】書写校合(⊙上一八五下)
★正安四年二月(一三〇三)			根来寺中性院									【傳法灌頂三昧耶戒作法】三帖編纂(⊙下一六六六下)
★嘉歷元年八月三十日(一三二六)												頼瑜【秘密記】一帖編纂(⊙上一二七四下)

【表Ⅱ】具支灌頂受法一覽

日	時	會	處	阿闍梨	具支	印可	内	容
理性院流								
文應二年十二月十二日(二二六一)			木幡南院	真空	◎	—	理性院流宝心方傳法灌頂	
伝法院流(成就院密嚴院流木幡方)								
理性院流								
弘長元年(一二六一)			木幡觀音院	真空	◎	—	伝法院流具支灌頂	
勸修寺流								
弘長四年二月二日(二二六四)			醍醐寺成身院	真空	◎	—	理性院流鳥羽僧都方傳法灌頂	
地蔵院流								
弘長四年二月四日(二二六四)			醍醐寺成身院	真空	◎	—	勸修寺流石山靜譽方傳法灌頂	
地蔵院流								
弘安二年十二月二六日(二二七九)			高野山中性院	實勝	◎	—	地傳法灌頂(遍三四四下)	

【表Ⅲ】印可准頂阿闍梨別一覽
 「一」真空

日	時	會	処	阿闍梨	具支印可	内	容
①安祥寺流							
文應元年（二二六〇）		高野山中性院		真空		【臨終秘印】（真七―一二八下）	
血脈							
宗意 実嚴 成嚴 隆嚴 真空 頼瑜 頼淳 増喜 聖憲 聖増（東十三 古安一二五 許可血脈）							
②伝法院流							
了、文應二年一月十二日（二二六一）		木幡觀音院		真空		【成就院五重】（東十五 成二九七）	
血脈							
覚饒 兼海 隆海 覺尋 定浄 隆盛 真空 頼瑜（東十五 成二九九）							
い、文應二年一月十三日（二二六一）		木幡觀音院		真空		【秘密印信五重】（東十五 成三〇〇）	
血脈							
覚饒 證印 玄證 房海 定意 實證 真空 頼瑜（東十五 成三〇三）							
③成就院流							
了、文應二年一月十二日（二二六一）		木幡觀音院		真空		【紫金臺寺五重】（東十五 成三〇六）	
血脈							
寬助 信證 琳助 心蓮 寬琳 明壬 道範 劔覚 真空 頼瑜（東十五 成三〇五）							
い、文應二年一月十二日（二二六一）		木幡觀音院		真空		【双圓性海大事】（東十五 成三〇九）	
血脈							
二品親王（泉殿御室） 寂忍 心蓮 寬琳 明任 道範 劔覚 真空 頼瑜（東十五 成三〇九） 【※文應二年九月二八日（真一八一―三一八下）】							

日	時	会	処	阿闍梨	具支印可	内	容
④理性院流							
ア、文應二年十二月十二日(二二六二)		木幡南院		真空	◎	○	理寶心流傳法灌頂(東十一 理四六三)
血脈							
賢覺 賢信(憲) 乘印 勝因 覺舜		真空 賴瑜(東十一 理四六四)					
イ、文應二年十二月十二日(二二六二)		木幡觀音院		真空		○	理鳥羽僧都流傳法灌頂(東十一 理四六七)
血脈							
賢覺 宗命 宗嚴 行嚴 真空 賴瑜(東十一 理四六八)							
ウ、弘長二年十二月九日(二二六二)		木幡南院		真空		○	理寶心傳法許可(東十一 理四七八)
エ、弘長四年二月二日(二二六四)		醍醐寺成身院		真空	◎	○	理鳥羽僧都流傳法灌頂(東十一 理四七〇)
血脈							
賢覺 宗命 宗嚴 行嚴 真空 賴瑜(東十一 理四七一)							
オ、弘安六年六月二八日(二二八三)				真空		○	理性院正流妙成就印可(東十一 理四七四)
⑤勸修寺流							
ア、弘長四年二月四日(二二六四)		醍醐寺成身院		真空	◎	○	勸石山方傳法灌頂(東八 觀三三)
血脈							
静譽 宗親 覺蓮 慶雅 朗澄 慶鏤 真空 賴瑜(東八 勸三八)							
⑥金剛王院流							
ア、				真空	◎	○	金傳法灌頂(東六 金三)
血脈							
聖賢 源運 雅西 見阿 空詮 智海 真空 賴瑜(東六 金四)							

贈僧正頼瑜諸流相承考

〔二〕 経瑜

日	時	会	処	阿闍梨	具支印可	内	容
① 勸修寺流							
イ、文永五年六月十四日（二二六八）		高野山花遊院		経瑜	—	○	勸中川秘密傳法灌頂秘印（東八 勸三）
血脈							
嚴覚 実範 朝譽 明遍 覚禪 経瑜 頼瑜（東八 勸二十）							
② 伝法院流							
ウ、文永五年七月十日（二二六八）		高野山花遊院		経瑜		○	〔成就院閑観房五重〕（東十五 成二七九）
血脈							
覚鏡 證印 玄證 房海 覚禪 経瑜 頼瑜（東十五 勸二九三）							
③ 勸修寺流							
ウ、文永五年七月十三日（二二六八）		仁和寺真光院		経瑜		○	勸〔聖勸音〕印可（東八 勸二六）
血脈							
嚴覚 実範 朝譽 明遍 覚禪 経瑜 頼瑜（東八 勸二十）							
④ 三宝院流							
ア、文永五年七月十三日（二二六八）		仁和寺真光院		経瑜		○	三宝院印可（東六 金五二）
⑤ 金剛王院流							
イ、文永五年七月十三日（二二六八）		仁和寺真光院		経瑜		○	金〔小卷〕2卷（東六 金五二）
⑥ 勸修寺流							
エ、文永五年七月十五日（二二六八）		仁和寺真光院		経瑜		○	勸〔小野六帖〕印信（東八 勸二六）
オ、文永七年二月二四日（二二七〇）		仁和寺真光院		経瑜		○	高尾助阿闍梨方第三重大事（東八 勸二四）

③成就院流

工、文永八年十二月上旬(一二七二) 仁和寺真光院 經瑜 ○ 『若凡若聖大事』(真一八―三三三下)

〔三〕明道

日	時	会	処	阿	闍	梨	具	支	印	可	内	容
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

⑤勸修寺流

カ、弘安八年二月二十九日(二二八五) 木幡觀音院 明道 ○ 勸瑜祇經灌頂(東八勸六一)

〔四〕實深

⑥三宝院流

イ、文永五年十二月八日(一二六八) 六條若宮御房 實深 ○ 諸授印可了(実三五九上)

〔五〕隆盛

③成就院流

? 隆盛 ○ 成就院五重(東一五成)

③伝法院流

? 隆盛 △ ○ 成就院密嚴院伝法灌頂(東一五成)

? 隆盛 ○ 成就院密嚴院五重(東一五成)

贈僧正頼瑜諸流相承考

【表Ⅳ】印可灌頂流派別一覽

日	時	会	処	阿闍梨	具支	印可	内	容
①安祥寺流								
文應元年（一二六〇）		木幡觀音院		真空		○	【臨終秘印】（真七―二八下）	
血脈								
宗意	實嚴 成嚴 隆嚴 真空 頼瑜 頼淳 増喜 聖憲 聖増（東十三 古安一二五 許可血脈）							
②伝法院流								
イ、文應二年一月十二日（一二六一）		木幡觀音院		真空		○	【秘密印信五重】（東十五 成三〇〇）	
血脈								
覺鏝 證印 玄證 房海 定意 實證 真空 頼瑜（東十五 成三〇三）			高野山花遊院	經瑜（隆盛）		○	【成就院閉觀房五重】（東十五 成二七九）	
ウ、文永五年七月十日（一二六八）								
血脈								
覺鏝 證印 玄證 房海 覚禅 經瑜 頼瑜（東十五 成二九三）				經瑜		○	【若凡若聖大事】（真一八一―三三七下）	
エ、文永八年十二月上旬（一二七二）			仁和寺真光院					
③成就院流								
ア、文應二年一月十二日（一二六一）		木幡觀音院		真空		○	【紫金臺寺五重】（東十五 成三〇六）	
血脈								
寬助 信證 琳助 心蓮 寬琳 明壬 道範 劔覚 真空 頼瑜（東十五 成三〇六）								
イ、文應二年一月十二日（一二六一）		木幡觀音院		真空		○	【双圓性海大事】（東十五 成三〇九）	
血脈								
二品親王（泉殿御室） 寂忍 心蓮 寬琳 明任 道範 劔覚 真空 頼瑜（東十五 成三〇九）								
【※文應二年九・二八（真十八―三二八下）】								

日	時	会	処	阿闍梨	具支印可	内	容
④理性院流							
了、文應二年十二月十二日(一一二六)		木幡南院		真空	◎	○	理寶心流傳法灌頂(東十一 理四六三)
血脈							
賢覺 賢信 乘印 勝因 覺舜 真空		賴瑜(東十一 理四六四)					
了、文應二年十二月十二日(一一二六)		木幡南院		真空	◎	○	理鳥羽僧都流傳法灌頂(東十一 理四六七)
血脈							
賢覺 宗命 宗嚴 行嚴 真空 賴瑜(東十一 理四六八)							
了、弘長二年十二月九日(一一二六一)		木幡南院		真空	◎	○	理寶心傳法許可(東十一 理四七八)
了、弘長四年二月二日(一一二六四)		醍醐寺成身院		真空	◎	○	理鳥羽僧都流傳法灌頂(東十一 理四七〇)
血脈							
賢覺 宗命 宗嚴 行嚴 真空 賴瑜(東十一 理四七二)							
了、弘安六年六月二八日(一一二八三)		仁和寺真光院		經瑜		○	理性院正流妙成就印可(東十一 理四七四)
⑤勸修寺流							
了、弘長四年二月四日(一一二六四)		醍醐寺成身院		真空	◎	○	勸石山方傳法灌頂(東八 勸三二)
血脈							
靜譽 宗觀 覺蓮 慶雅 朗澄 慶鏤 真空 賴瑜(東八 勸三八)							
了、文永五年六月十四日(一一二六八)		高野山花遊院		經瑜	△	○	勸中川秘密傳法灌頂秘印(東八 勸三三)
血脈							
嚴覺 實範 朝譽 明遍 覺禪 經瑜 賴瑜(東八 勸二十)							

贈僧正頼瑜諸流相承考

日	時	会	処	阿	閻	梨	具	支	印	可	内	容
ウ、文永五年七月十三日	(二二六八)	仁和寺真光院		經瑜			◎		○		勸【聖勸音】印可	(東八 勸二六)
血脈												
嚴覺	実範	朝譽	明遍	覚禪	經瑜	頼瑜	(東八 勸二十)					
エ、文永五年七月十五日	(二二六八)	仁和寺真光院		經瑜					○		勸【小野六帖】印信	(東八 勸二六)
オ、文永七年二月二四日	(二二七〇)	仁和寺真光院		經瑜					○		高尾助阿闍梨方第三重大事	(東八 勸二四)
カ、文永八年十二月四日	(二二七二)	木幡觀音院		真空					○		【求聞持悉地成就印言】	(東八 勸七二)
キ、弘安八年二月二九日	(二二八五)	木幡觀音院		明道					○		勸瑜祇經灌頂	(東八 勸六一)
⑥三寶院流												
ア、文永五年七月十三日	(二二六八)	仁和寺真光院		經瑜					○		三寶院印可	(東六 金五二)
イ、文永五年十二月八日	(二二六八)	六條若宮御房		真空					○		諸授印可了	(実三五九上)
⑦金剛王院流												
ア、				真空			◎		○		金傳法灌頂	(東六 金三)
血脈												
聖賢	源運	雅西	見阿	空詮	智海	真空	頼瑜	(東六 金四)				
イ、文永五年七月十三日	(二二六八)	仁和寺真光院		經瑜					○		金【小卷】2卷	(東六 金五二) 授与される。

■〈諸阿闍梨からの法流伝受〉

*以下、上に提出した年譜の記述にもとづいて、頼瑜の諸阿闍梨からの受法の様子を確認していきたい。

(イ) 真光院經瑜

◎頼瑜は、康元元年冬(一二五六)、仁和寺の真光院經瑜から広沢流の傳授を受けている。まだ豪信(高信)と名乗っていた頼瑜は、建長五年頃より仁和寺の成蓮房兼意(常喜院心覚の師の一人)及び道悟房忠俊ゆかりの高野山禪定院において聖教を書写しており、經瑜に受法を遂げる頃、丁度『釋論開解抄』の撰述にいそしんでいたことが知られる。

○その後、文永五年五月二十一日に、高野山花遊院に寄寓していた經瑜を尋ねたところ、同師伝領本の『密嚴院流諸尊法等隆海法印記』の筆写を許され、後日の再治を託されている。この時、頼瑜は印可(文脈上、伝法院流の印可を指している)の受法を申出たが、その時には許可されず、同二十三日になって許可が下り、印可加行結願の後、印可が授けられている〔國卷二「裏付中性院記」奥〕。

同六月十四日(一二六八)には、同院持仏堂に於いて、勸流中川方の秘密傳法灌頂(許可)を受灌しており、同七月七日には仁和寺において、金剛王院実賢大僧正伝の『如宝愛染』一帖の傳授を受けている(『秘鈔問答』卷十二末・五〇六下上)。

○翌七月十日には伝法院流閑観方の五重印可を授け、また同月十三日には、仁和寺真光院に会処を移して勸流中川方、ならびに三宝院流の印可(金三方許可)が授与され、この時実賢大僧正伝『金剛王院流小卷』二巻が授けられている。

○以後、文永八年十二月上旬、仁和寺真光院にて『若凡若聖大事』の傳授を受けるまで、頼瑜は經瑜から小野流の秘書『小野六帖』にまつわる勸流最極秘印等の傳授に与つてゐる。

○さらに後年、弘安七年二月二十二日（一二八四）頃、仁和寺真光院において、經瑜から保寿院覚成口・北院御室守覚輯『澤見抄』の傳授を受けてゐる（『秘鈔問答』卷第三・三四五頁中）。なお、その受法内容とおぼしき記述が、經瑜相承の仁和寺伝再治本十五卷『秘鈔』の本文や伝受聞書と共に、『秘鈔問答』全編にわたつて引用されてゐることは、頼瑜編『澤見口決』の存在や、頼瑜が經瑜から受法した内容を知る上で注目に値する。

○經瑜は、真光院第二世・根来寺大伝法院第十九世座主の金胎房覚禪の付法の弟子である。師匠の覚禪からは、大伝法院流閑觀方、勸流中川方を相承しており、それらを頼瑜に傳授したことは、きわめて自然の成りゆきであつたように思われる。特に大伝法院流は、經瑜の住房である真光院の歴代が、根来寺大伝法院の座主職を勤める例が多かつたことから分かる様に、その法流は、法の源泉であり、かつよすがでもある覺鏡上人自筆の聖教や由緒の法具、本尊などと共に、真光院に伝承されてきたことはよく知られてゐる（頼瑜は伝流を經瑜・真空・隆盛の三師より相承してゐる）。

○さて、次に留意せねばならないことは、頼瑜が經瑜より相承した勸流中川方、および金剛王院流実賢方（こんごん金三方）の由来についてである。

中川方は、鳥羽僧正範俊はんじゆんの跡を嗣いだ勸修寺嚴覚げんかくの高弟の一人である大和中川成身院の実範じつはんを派祖とする法流で、東大寺山城国別所光明山寺を中心に伝承されてゐた。派祖実範の跡を襲つたのが、『秘宗教相抄』の撰者である朝（ちち）重ちゆう譽よである。この朝譽の付法者の一人が、藤原通憲（信西入道）の息子で、醍醐寺覚洞院勝賢の俗兄にあたる高野山蓮華谷の明遍みょうへんであつた。明遍は、また梅尾高山寺の明恵上人高辨の門人でもあつたが、彼は、文

治の末年（一一八九）から、いわゆる南都浄土教と真言密教小野流の会合点とも称すべき光明山に通世しており、その後、建久六年（一一九五）には、高山山蓮華谷往生院（兼意を派祖とする金玉方院室）に再度の通世を果している。

經瑜は、明遍の付法者の一人である仁和寺真光院の金胎房覺禪より、小野勸修寺流の中でも、後述の石山静譽方と共に最も南都仏教との関係が深い、件の勸流中川方を相承している。『真俗雜記』には、光明山義、木幡義、真光院義等、多くの学説が引証されていることは、榎田良洪師（『續真言密教成立過程の研究』第四章「頼瑜と新義教学」一七〇頁）のつとに指摘されるところであるが、その中、実範―朝譽系の光明山義と經瑜ゆかりの真光院義（花遊院義）全般については、如上の勸流中川方の法流相承を介して、經瑜から頼瑜へと伝えられた事は、まず疑いを容れえないであろう。

◎一方の金剛王院流であるが、頼瑜が經瑜から相承したのは、理智院隆澄によつて伝えられた仁和寺伝金剛王院流実賢方であり、その内容の一端は、智山諸法流相承所伝の『金剛王院流小卷物』巻四、巻五に顕著である。この二巻の小卷物は、文永五年七月十三日、仁和寺真光院に於いて、頼瑜が經瑜から三宝院流の印可（金三方許可）を授与された折に授けられたものである。その内容は、仁和寺相承の金剛王院流実賢方所伝の秘密灌頂についての口決が纏められたもので、恐らく仁和寺理智院、釈迦院を経て、真光院へ伝えられ、頼瑜が伝領するにいたつたものと思われる。

○さて金剛王院流実賢方であるが、この法流は一般に金三方（三宝院流兼伝の金剛王院流を意味する。一方三宝院を交えない相承の方は唯金方とよばれる）と称され、その派祖である実賢は、金剛王院第四世雅西の正嫡、かつ三宝院座主覚洞院勝賢、および金剛王院第三世賢海からも重受して、金剛王院第五世・三宝院第三十三世座主

を嗣いだ人物である。その付法者には、禪林寺僧都静遍じやうへん、金剛王院第六世勝尊、仁和寺理智院隆澄、山本僧正覚濟、加茂の空觀上人如實、三輪宝篋上人蓮道など、南山教学における本有家に連なる人々が居た。

○特筆すべきは、実賢は勸流中川方の明遍の門弟としては、「法然房源空の没後の弟子」を自任した上述の禪林寺静遍僧都と同宿弟子（兄弟弟子）の間柄にあり、また実賢と静遍は、共に高野山正智院道範に法流を授けていることである（菊池勇次郎「醍醐寺聖教の中の浄土教」『研究紀要』第五号「醍醐寺文化財研究所」一九八三）。

菊池氏は、道範が二人の師より受法した法流について特定されてはいない。しかし、二人は、共に金剛王院流の直系をくみ、しかも『秘密瑜祇』の相承をめぐり、後世、立河流に直結する邪義を三輪宝篋上人蓮道等に伝え、擾乱を醸したとして、高野山宝性院の宥快などから手厳しく糾弾されている（宥快『立河聖教目録』や金沢文庫藏『天地麗気記』残簡等、真鍋俊照『邪教立川流』筑摩書房・一九九九刊）。事実、道範の『瑜祇経口決』全五卷は、法性寺御所における実賢の『瑜祇経』傳授の聞書（真一五・一〇九頁上奥）であり、『ユギソタラン口伝』全二卷は、静遍および五智房融源からの傳授聞書（續真一七）であることから、道範が金剛王院流所伝の『瑜祇経』を相承したことは紛れもない史実である。故に、ここでは実賢・静遍の両師から道範に伝えられた法流は金剛王院流実賢方であったと考えておきたい。（ちなみに頼瑜は『瑜祇経拾古鈔』を著しているが、すべてを肯定しては居ないが、そこには道範の二本ある『瑜祇経口決』等が多く引用されて居り、恐らくは経瑜と真空から授けられた金剛王院流の相承に則って、同書が撰述されたものと思われる。）

○さらに付け加えることは、禪林寺静遍と理智院隆澄が、それぞれ仁和寺釈迦院の四世、五世院務を勤めて居り隆澄から仁和寺に金剛王院流が伝承され、しかも彼等は本有門に立つ人々であったことである。

○ここで金剛王院流の特色をあげるとすれば、醍醐三流中、鳥羽僧正範俊―権僧正勝覚―三密房聖賢と伝えられ

た小野流所伝の『瑜祇経』伝承に与り、その影響が際だつてゐることであろう。小野流所伝の『瑜祇経』傳授は、即身成仏の境地に住する阿闍梨の心的境界に直に参入することを眼目とした「瑜祇灌頂（無作業灌頂・内作業灌頂・一心灌頂・以心灌頂）」、如意宝珠三昧に諸仏を引入れることにより現世利益の効力を甚だしく増幅させる「如意宝珠法（如宝愛染法・如宝尊勝法）」即身成仏の仕組みを明した「理・智・事ノ三點説」等、まさに小野流不共の秘法、ならびに秘義の源泉であつた。

◎以上のように、頼瑜は、經瑜から勸流中川方明遍伝、及びその門下の実賢ゆかりの金剛王院流を相承している。經瑜が伝えた密教諸流には、光明山寺、及び本有家の人々との密接なつながりが見て取れることは、十分注意せねばなるまい。

(口) 報恩院憲深・蓮藏院実深・真言院聖守

◎【報恩院憲深】報恩院憲深は、遍智院成賢の高弟の一人（道禪・頼賢・憲深・道教）であり、世に云う三宝院流憲深方の流祖である。憲深の父は、師の成賢にとつて兄にあたる藤原通成であるから、師匠は叔父にあたることがわかる。

憲深は、成賢僧正の付法者の一人であるが、成賢自身は入滅に際し『讓状』（遺言のこと）を著し、道教僧都を後継者に指名した。しかし、道教が早逝し、頼賢は高野山に通世したため、成賢が自身の後生を弔うために造営した私寺である極樂房（報恩院）を管領していた憲深が、師の遺鉢を嗣ぐ事になった。一方で憲深は、成賢の兄弟子にあたる実繼座主の法流・聖教等をも良海僧都から伝えられていたため、まさに名実ともに三宝院流の正統後継者といえる人物であつた。頼瑜は、憲深僧正門下に身を寄せ、師の入滅にいたるまで、醍醐寺流密教の相承に全力を傾注することになったのである。

○さて大須観音真福寺所藏聖教の奥書（㊦下―五九九上）によれば、頼瑜が憲深僧正から初めて傳授を受けたのは、弘長元年五月五日（一二六一）より同九日にかけて、醍醐寺報恩院における『護摩頸次第』一帖の傳授であるとされる。

一般には、弘長元年六月十二日、はじめて醍醐寺報恩院の門をくぐり、憲深僧正によつて交衆きょうしゆに列せられたとされる。ともあれ同月二十三日には、一介の衆僧しゆそうではなく、公式法会等に参加し得る有職うしきに補されている。

○その後、頼瑜は、弘長元年六月十六日から、弘長二年十二月頃まで、三宝院流『四度部聖教』や『薄雙紙』初重等の傳授を受け、その年の十二月九日、一旦、木幡へ赴き、真空にしたがつて理性院流宝心方の傳法灌頂を受灌している。

翌三年二月二十七日には、醍醐寺報恩院において、憲深僧正から『作法集』の傳授を受けた模様である。

○同年三月十日、醍醐寺報恩院において、憲深僧正から、同僧正自筆本の範俊撰『如宝愛染』一帖を写得するところが特別に許可された（『秘鈔問答』卷十二末・五〇六下上）。この事實は、頼瑜が、既にそれ以前に、『秘鈔』の傳授を滞り無く済ませたことを裏付けている。それを証明するかの如く、『秘鈔問答』卷第十一末（四九〇下）には、次のような記事が見られる。「予、先師僧正御房胎藏重受の時、御門弟、僧綱、凡僧、数輩列座、彼等人起ち去りし後、檀波羅蜜秘印これを授けらる。これ則ち、此の『秘鈔』の秘藏せらるるなり。すなわち南都の中道上人、高野の空教上人等、傳法の節を遂ぐるの後、『秘鈔』伝受申し請う時、御本を出せられず。各本を以て大法、秘法、外尊、これを授けらる。醍醐寺にて傳法を遂ぐるの中、蓮藏院、宝池院の両僧正、松橋法印弘義律師の外、これを授けられず。予、傳法を遂げずと雖も、彼の御本を賜い畢んぬ。」（この一文は『眞俗雜記』第九（眞）―一五〇上十五「胎藏檀波羅蜜秘印」にも載せられているが、『秘鈔問答』の方がより詳しい情報を伝

えている)

つまり、頼瑜は灌頂受法こそ許されなかったが、憲深僧正入室の高弟以外、目にする事もかなわない、件の御本(「憲深僧正自筆本」)の閲覽と写得を許可されていた事が知られる。いかに憲深僧正から篤く遇あつされていたかがうかがわれる逸話いつわである。

○同年九月六日には、憲深僧正が入滅されている(『秘鈔問答』卷五・三六九上)が、それまでの間に、『秘鈔』や『御遺告』(『秘鈔問答』卷六・三九七上)、あるいは『灌頂部』(『眞俗雜記』第九・一六六上)八二「灌頂無言行道用意事」、八三「大阿闍梨持物之事」、八九「三昧耶戒壁代前机燈事」、九一「還列時出道場教授受者前後事」)等の傳授を受けている。頼瑜は、さらに寸暇を惜しむが如く、憲深僧正が実継座主より相承した、三宝院根本(草本)の『厚草子』(『眞俗雜記』第九・一七〇下)等の筆写を行っていたことが知られる。まさに師匠の死の直前まで、法流の相承に全力を傾注していたことが理解できる。

◎【蓮藏院実深】憲深僧正の入滅後、報恩院の院家、ならびに源氏が崇敬して止まない京都六条にある源頼朝創建の若宮八幡宮別当を嗣いだのが、蓮藏院の実深僧正である。頼瑜は、実深僧正から、文永五年十二月八日(一二六八)、六條若宮八幡宮別当御坊に於いて諸の印可を授けられているが、そこには憲深僧正から灌頂受法出来なかつたことを補う意味があつたと見て良いだろう(ちなみにその折の血脈が、現流の中性院流所伝『中性院流印可血脈』一紙として伝えられていることは貴重である)。そのほか、諸尊法等について授つた口決類が、『秘鈔問答』の中に、「蓮藏院云」等として引用されているので、実深からの受法が印可のみにとどまらなかつた事が知られる。

◎【眞言院聖守】頼瑜が、聖守阿闍梨あずかに謁して法流伝受に与つたのは、文永十一年五月二十八日(一二七三)を

初めとする。ここでは、『野月鈔』十五卷、『異尊』二卷、『作法』二卷などが伝受されたと記録されている。この場合の『野月鈔』は、仁和寺伝の再治本『秘鈔』(『秘鈔問答』卷第十四末・五四三頁中)を指すので、頼瑜は聖守阿闍梨から仁和寺伝の流例に則った『秘鈔』傳授を受けたのかも知れない。

◎いづれにせよ、頼瑜は醍醐寺報恩院一門にあっては、派祖憲深僧正の覚えもめでたく、醍醐寺報恩院秘蔵の聖教(定海口・元海記の草本『厚草子』、成賢裏書の秘本第三重『秘鈔』等)、圖像(定海指授・珍海画『仁王經秘曼荼羅』等)、法具(転法輪筒)等を実際に見聞することが可能な立場にあった。のみならず、直接の門弟でさえも通常は傳授され得ない秘法、大法のほぼ全てを、憲深僧正秘蔵本を用いて傳授されていることは、特筆に値する。頼瑜の『秘鈔問答』には、こういった様子が子細に伝えられている。

(ハ) 木幡(廻心上人) 真空・明道

◎木幡真空もとの名は定兼。藤原定親の息子で、幼少の頃に醍醐寺理性院四世院務の行嚴阿闍梨の門に入り出家。その後東大寺東南院に赴き真禪大徳について三論を学び、二十歳の時、東大寺戒壇院において四分律によって具足戒を授つている。また理性院行嚴の許では、理性院流の傳法准頂に入壇し、同流宗命方、宝心方面相承を伝え、その他、小野・広沢の諸阿闍梨の許で、多くの法流を相承している。一方、唐招提寺の大悲菩薩覺盛門下にあつては、良遍、聖守、円照等の同学者として、律の宣揚につとめたことでも著名である。

○さて、ここで真空の本流である理性院流の特徴について一言しておきたい。いくつか異説があるが、同流の特徴は、太元帥御修法、牛黄加持、壽延經護(じゅえんきょうのみもり)の三大秘法の相承と、天神御筆の繪旨、大師御筆の宝珠曼荼羅、聖宝相伝の牛黄、および御筆の准胝絵像の四種秘宝の護持、ならびに四重ノ大事の存在によつて端的に表される(准三后義演編『醍醐寺新要録』下、宥快口・快全記『血脉記』「理性院法流事」「續真

―二五・一三三頁上〕等〕。

筆者は、さらに覚鑠上人の求聞持悉地成就の故事を伝える、理性院流祖賢覚伝『求聞持第八度大事』をこれらに加えたい。実は、頼瑜は真空からこの大事も授っていたが、大事の切紙を紛失したらしく、その後、真空門下の明道阿闍梨より重受している。因みに頼瑜は、隆盛・真空・經瑜・明道の四師からこの大事を伝えている。

◎頼瑜は、文應元年、木幡観音院において、上述の真空から、安祥寺流所伝『臨終秘印』の傳授を受けている。その後、弘長四年春頃までの間に、理性院流、伝法院流、成就院流、勸流、金剛王院流と、実に小野・広沢・醍醐にわたり、六流派十五相承になんなんとする多くの法流の付法あずかに与っている。

◎文應二年正月十二日には、木幡南院道場において理性院流宝心方傳法灌頂に入壇し、その時あわせて宗命方許可灌頂が授与されている。その後、弘長二年十二月九日には、木幡南院道場において同流宝心方傳法許可灌頂を、同四年二月二日には醍醐寺成身院において同流宗命方の傳法灌頂あずかに与っている。のみならず頼瑜は傳法灌頂、許可灌頂の法水に浴する一方で、真空から理性院流相伝の四箇秘法等の傳授や、祖師累代の秘伝書の類の披見、ならびに写得に力を尽していたことが、『秘鈔問答』の記述から理解される。こういった努力の成果が、いずれ『理宗口決』や『理宝口決』として結実したといえよう。

◎文應二年正月十三日には、木幡観音院において伝法院流兼海方木幡相承（成就院木幡）傳法灌頂に入壇し、あわせて伝法院流閑観方木幡相承五重、成就院流信証方（西院流）紫金臺寺乃至木幡相承五重、成就院流紫金臺寺方木幡相承雙圓性海大事が印可されている。印可の内容と法流の数から云って、伝法院流兼海方傳法灌頂入壇の折に、同壇で伝流閑観方、成就院流諸方、同雙圓性海大事が授けられたと考えられる〔國卷三、四参照〕。

◎弘長四年二月四日には、醍醐寺成身院において、勸流石山方の傳法灌頂に入壇している。この時、受法した法

流が勸流石山静譽方である。

静譽方の派祖である越前阿闍梨静譽は、鳥羽勝光明院壇處において、小野流傳法灌頂に入壇している。その折には、初夜胎藏界は鳥羽僧正範俊、後夜金剛界を勸修寺嚴覚、以上二師より格別に受灌していると伝えられている（祐宝編『傳燈廣録』）。そのため、静譽阿闍梨伝の勸流には、勸流小野静譽方（範俊伝）、勸流石山静譽方（嚴覚伝）の二方が併伝されている。

頼瑜が真空から受法した方は、嚴覚—静譽—宗観の血脈を伝えている事から、勸流石山静譽方であることが理解できる。ちなみに静譽の正嫡は、朝譽であると目されて居り、勸流静譽方の本流は、やはり光明山寺の朝譽一門がこれを伝えていたことが知られる。いずれにせよ、これら勸流静譽方は、前に頼瑜が経瑜から相承した勸流中川方と同じく、東大寺山城国別所光明山寺をその拠点としており、真空からこの法流を受法した背後には、静譽伝光明山義の相承がうかがわれる。

○さらに年次はつまびらかではないが、頼瑜は真空から（唯金方）金剛王院流源運相承、（金三方）金剛王院流実賢相承をも伝えている。この流の特徴は、前の経瑜法印よりの受法の下りで屢々述べたので割愛する。詳しくは『金剛王院流小卷』巻一を参照されると良い。

◎『秘鈔問答』には、理性院流所伝の秘書の類が実に多く引用されているが、その質の高さ内容の豊富さは、正にたくい希であるという他、適当な言葉が見当らない。そういった秘伝書の類は、やはり真空の許で披見して写得したか、場合によっては授与されたとしか考えられない。頼瑜は真空から多くの法流の傳授に与ってはいるが、内容的にみて最も充実しているのが件の理性院流である。これに加えて、真空所伝の光明山義相承との関係から、勸流石山静譽方、及び金剛王院流の付法を受けたことも、注意を喚起する出来事である。

(二) 覚洞院実勝・親快

◎覚洞院実勝（あるいは西南院実勝）は、西園寺公經の息子。文永元年十二月四日、上醍醐持宝院において、覚洞院親快に従い、地蔵院流道教方具支灌頂を遂げている。

実勝の師である親快は、遍智院成賢の遺言で、その後継者に指定された道教の正統後継者であった。師の道教が早逝したため、一門の宗家の座は、報恩院憲深に委ねられることとなったが、もし道教が長命であれば、遍智院一門の首座（則ち醍醐寺三宝院流の宗家）は、遠からず親快自身が継承することになったであろう。こういった事情があつたので、地蔵院流一門は、ことに報恩院流一門に対して、自らの法統こそが正統であるという気概をもち続けていた。事実、相承の本尊、聖教、法具などは、報恩院一門の伝領するそれと比較した場合、確かに質・量ともにひけをとらないものがある。報恩院の方には、三宝院累代の原本がそのまま集積、伝領されている。一方の地蔵院の方には、成賢が原本から直接転写したものが伝えられており、それらには「秘鈔」の場合を例にあげるまでもなく、成賢の裏書等が克明に記されていたと伝えられている。地蔵院一門が、成賢の嫡伝を標榜するよすがは、祖師の手澤本等の存在によつてうなずけるところである。

○頼瑜は、地蔵院流道教方の高弟の一人である実勝に従つて、同流の相承を受けている。

弘安元年七月五日から同八月十九日にかけて、高野山小田原谷において、「石山道場観（淳祐撰「要尊道場観」）や「妙鈔」等の傳授を受け、同二年六月十日頃には、西南院秘藏の臺皮籠御本（だいのかむこ）によつて、憲深僧正所持本からの転写本「作法集」の校合（きょうごう）を行っている。

同年十二月二十六日には、高野山中性院道場において、地蔵院流道教方の傳法灌頂に入壇しており、翌年までには第二重、三重の重位が印可されて居り、その内容は「道教不共ノ大事」（元海伝「長統印信」）に伝えられて

いる。

◎『秘鈔問答』をみると、頼瑜が西南院実勝のみならず、先代の覚洞院親快からも、数々の口伝、密訣の相承に与つてゐる事が分かる。それによつて、頼瑜が単に傳法灌頂や許可灌頂に浴したのみならず、相承の口訣にもとづいた諸尊瑜伽、秘法、大法等の傳授を受け、その内容の聞書を作成してゐたことが分かる。

中でも特筆すべきは、小野流・金剛王院流の『瑜祇經』相承上、最もぬきんでた特色を示す、件の「理・智・事ノ三點説」に通底する教義が、『道教不共ノ大事』に認められることであり、この大事は三宝院流憲深方には伝えられて居らず、成賢門流の中、ひとり地藏院流のみがこれを伝承して居り、頼瑜は実勝よりこれを相承したと目される点である。

〈おわりに〉

◎以上、頼瑜僧正が諸阿闍梨から相承した諸法流について、検討を加えてみた。

●今回の試みは、三浦章夫師、櫛田良洪師等によつて先鞭を付けられた史学的見地から跡付けられた歴史上の人物頼瑜の動向と、実際に灌頂、傳授を介して、いまに伝えられる中性院法流の祖としての頼瑜僧正の間に存在する、なんともいえぬぞかしい空隙（伝承と史実の狭間）を、何とかして埋めてみようという発想が発端である。

●そのために、頼瑜が伝えたとされる古聖教類を史料的に用い、今一度頼瑜の受法の足跡を洗い直してみた。結果、巷間もつともらしく吹聴される、頼瑜は自身が相承した諸法流をまとめあげて、中性院の一流をたてたという説が、きわめて脆弱なものであるということが知られた。頼瑜僧正は、諸阿闍梨から相承したあまたの法流を、それぞれその原形が損われないように正確に保持伝承してゐたことは、『智山諸法流相承』所伝の根来寺古聖教

類、および『秘鈔問答』、『眞俗雜記』等の内容によって明白であると考ええる。

●更に、頼瑜自身の相承した法流は、実に多岐に及ぶものがあるが、その受法内容から云って、伝法院流（成就院流を含む）・報恩院流・理性院流・地藏院流の四流が、最も充実・完備した形で伝承されたことが指摘できる。

●また光明山義・木幡義・真光院義の相承は、勸流及び金剛王院流の受法によって、法流と教義の一致した形で
の伝承が遂げられたことが推測される。

●頼瑜自身は、中性院流の派祖とされるが、智山七世運敵能化が『結網集』で指摘する様に、その流派は、地藏院流実勝方の統に則っている。頼瑜は多くの法流の中から、地藏院実勝方を自らの本流として択び出したが、その理由の一つとして、即身成仏実現の手段てだてである行法ぎょうぽうと、その理論的根柢となる教義の両者の根幹を担う、件の『道教不共ノ大事』の相承が指摘出来ると考える。